



たより

玄・光と闇のあわいに寄せて

西松 布咏

去る五月十四日仁和寺金堂伽藍において奉納演奏会を終えることができた。

世界遺産である金堂は空に聳える二王門から広く長く続く参道の北の奥に在り京都御所の紫宸殿を移築し阿弥陀三尊をはじめとするいくつもの仏様が安置されている。図らずも一月十九日宮園葎画伯の個展を觀に仁和寺を訪れた折りに特別に開けて下さった金堂の御仏様に手を合わせた時、唄い続けてこられたことへの感謝と共に、この伽藍で六歳から唄い初めた頃の原点に戻れたら・・・と胸を熱くした。いつもの稽古の後、美紗の会の佳咏会長にふとその思いを漏らすと「師匠！是非実現させましょっ！」と即座に力強い声が返ってきた。そのとき「いつか訪れる芸道の果てには闇の中で黒と白が織りなす悟りの心を唄う演奏をしたい」と長い間封印してきた願いが水の出花のように激しく溢れ出て揺らいでいた私の心は覚悟した。

程なくして金堂公演に向けて川畑、照沼(佳咏)いつも陰で支えて下さる加藤親子がスタッフとして立ち上がり御室桜の蕾がまだ固い三月十七日意を決して仁和寺を訪れた。

総務部の金崎さん、岩崎さんと協議の末、仁和寺が推進している芸術支援に紐づく奉納公演として五月十四日金堂公演が決定するに至った。



押本龍一

それからは、お互いに忙しい仕事を縫っての折衝のやりとりで真夜中になることもあり、御仏様によるご縁を良いことに大それた夢を抱いて周囲を巻き込んでしまった己の業の深さを何度も侘びた。

しかしながらもう後には戻れない。皆さんのご苦勞に報いるには何としてでも成功させなければ・・・と、これまでにない緊張の毎日であった。

四月二十九日「第六十三回美紗の会のつどい」を控えていたのでその稽古の合間を縫って唄い込んで行かねばならぬ身の辛さ。と同時に唄えば唄うほど道に迷ってしまう己の芸の未熟さを日々思い知らされた。



押本龍一

そんな不安な毎日ではあったが三味線を膝に置き正座で唄い始めるといつしか唄の世界で揺蕩うことができる幸せも感じる事ができた。日々の生活の中で「感謝と祈りの心」を忘れずに「到達できない」「会得できない」ことを知り、それでもなお「祈り続ける」というのが悟りの境地であると解く弘法大師のお教えは芸の道に通ずると挫けそうになる自分を叱咤激励した。

そしていよいよ開演前日の十三日スタッフと共に上洛した。

雨空にけむる二王門を潜り金堂への長い参道の果てに厳然と建つ金堂を目にした時「私達すごいことをしようとしているのね！」と事の重大さに思わず佳咏会長と叫んでしまった。

閉門になる五時過ぎからリハーサルが始まった。その頃には雨が激しくなり三昧の音に雨音が交じり、弾く撥が湿った糸に絡んでくる。明日もこうなるのだろうか・・・と不安になる。

伽藍の隅々まで響き渡る声だけがせめてもの救いと、深夜までのリハーサルを終えて傘をさして漆黒の激しい雨の中へ。最後まで付き合ったださった仁和寺の岩崎さんが三昧線が濡れては大変とさりげなく上衣を脱いで長箱を覆って下さった何気ない優しさはスタッフの語り草となった。

当日の早朝、浅い眠りから覚めて窓から空を眺めると雨は止んでいた。一月に訪れた同じ道を加茂川沿いに歩き薄墨色の空に向かって、亡き両親、導いて下さった五人の師匠に「今日は無心で唄いますのでどうかお見守り下さい」とお願いした。そして豊臣秀次一族が眠る「瑞泉寺」に立ち寄り、無事に会が終わりますようにと手を合わせた。

お昼過ぎ、宿から仁和寺に向かう頃から薄日が射しはじめ御室会館の控え室で三昧線を調弦する頃には眩しい光があたりに満ちみちた。真っ先に斉藤さん、咏扇さん、そして手伝いのお弟子達が次々と到着すると、いつもの楽屋風景となり私の緊張も徐々にほぐれていった。毎回「美紗の会のつどい」の受付を手伝って下さる高橋さん、前多さん、お話下さる京都在住の武田好史先生の暖かい笑顔もそぞろい踏み。

金堂も観音堂も五重塔も御室桜も草木の一本一本までもがそれぞれに「小宇宙」として存在しそれらが全て合わさったものが仁和寺という小宇宙」と第五十一世瀬川大秀門跡のご著書にあるが、生きとし生けるもの、存在する全てのものにそれぞれの役割があるとする「小宇宙の舞台」にこれから演奏する私は、役割を担って下さった皆さんの個々の命と共に臨める幸せをかみしめた。

開け放った扉から鳥の声が流れ涼やかな風が伽藍を渡る中、スタッフの懸命な作業で九十余りの客席も整い、灯の点検をしながらの声出しも終わる頃、辺りは夕闇のとばりに包まれ、どこからか数人のお坊さまの声明が聞こえて来る。

大林實温総長による仁和寺にまつわるお話の後、前奏に続き端唄「夕暮れ」から唄い始めた。背後におられる阿弥陀三尊像が見守って下さるお陰でいつもなら上がったしまうところだが、闇に包まれた伽藍は「四畳半の宇宙」ならぬ「仁和寺の宇宙」となると大海原の闇から我が音が聞こえて来るような穏やかな気持ちで演奏することができた。

金堂の裏堂（裏側の壁）には「五大明王」が描かれ守護神として三百年を超えても色鮮やかな躍動感でその目は慈愛や慈悲に満ち、出演を控え緊張している私を優しく包んでくれた。

不器用で一途な生き方しか出来ない私は芸の道でも迷い苦しみ悲しんで今に至ったがご縁の糸で導かれた御仏様の前で無心に何処までも？伸びる声が伽藍に響き渡っている・・・この至福の一瞬は生涯忘れ得ぬ私の宝となることだろう。

一部の最後の曲である富本「反魂香」は女人になる私の力を引き出して下さった「十一代目富本豊前掾」を襲名された石川譚月師の作品である。白髪の老女になっても「我が想いを叶えたい」と恋しい男のもとに魂夜這となって踊れる「白夜菊色の世界」は蠟燭の灯の下で飽くなき女の情念を熱唱することが出来た。

やがて木々を渡る冷気と霊気が忍び入り左右の扉が閉められると伽藍は漆黒の闇となる。

幽玄は闇の中に光をみる
かりそめの刻を
様々な色に染めてみたい
やがて玄になるまで

佳味会長の澄んだ声で二部が始まった。闇からの使者のような黒装束の武田先生が「玄に纏わるお話」の後「天地万象の根源となる闇の中で黒と白が織りなす悟りの心」を唄うべく「黒髪」と「雪」に想いを託した。

舞台で盲目の西松文一師が天空を仰ぐようなお姿で唄った「雪」を聴いた時の感動、その師が私の声を聞いて地唄の道に導いて下さった時の感激。を胸

に臨める幸せをかみしめた。



押本龍一

に唄ったのだが、蝋燭の揺れる炎と闇を全身全霊で唄う玄の道はまだまだ遠いことを悟るばかりであった。

花も雪も払えば清き袂かな

ほんに昔の昔のことよ

我が待つ人は我を待ちけん

何度も何十年も唄ってきたが、そのたびに唄への思いは変わって来る。

その昔は思いが伝わらない人への訴えであったり、独りの寂しさの滲みであったり。でも今回の「雪」は、「辛き命は惜しからねども」の箇所に来るとウクライナの悲劇を思い、「恋しき人は罪ふかく」の箇所に来ると憎きプーチンの顔が浮かんでくるのである。

不条理極まりない今の憂き世にただ唄う事しか出来ない自分の無力さを感じながらもやはり唄うしかない切なさで胸が苦しくなる。

人はなぜ唄うのか？

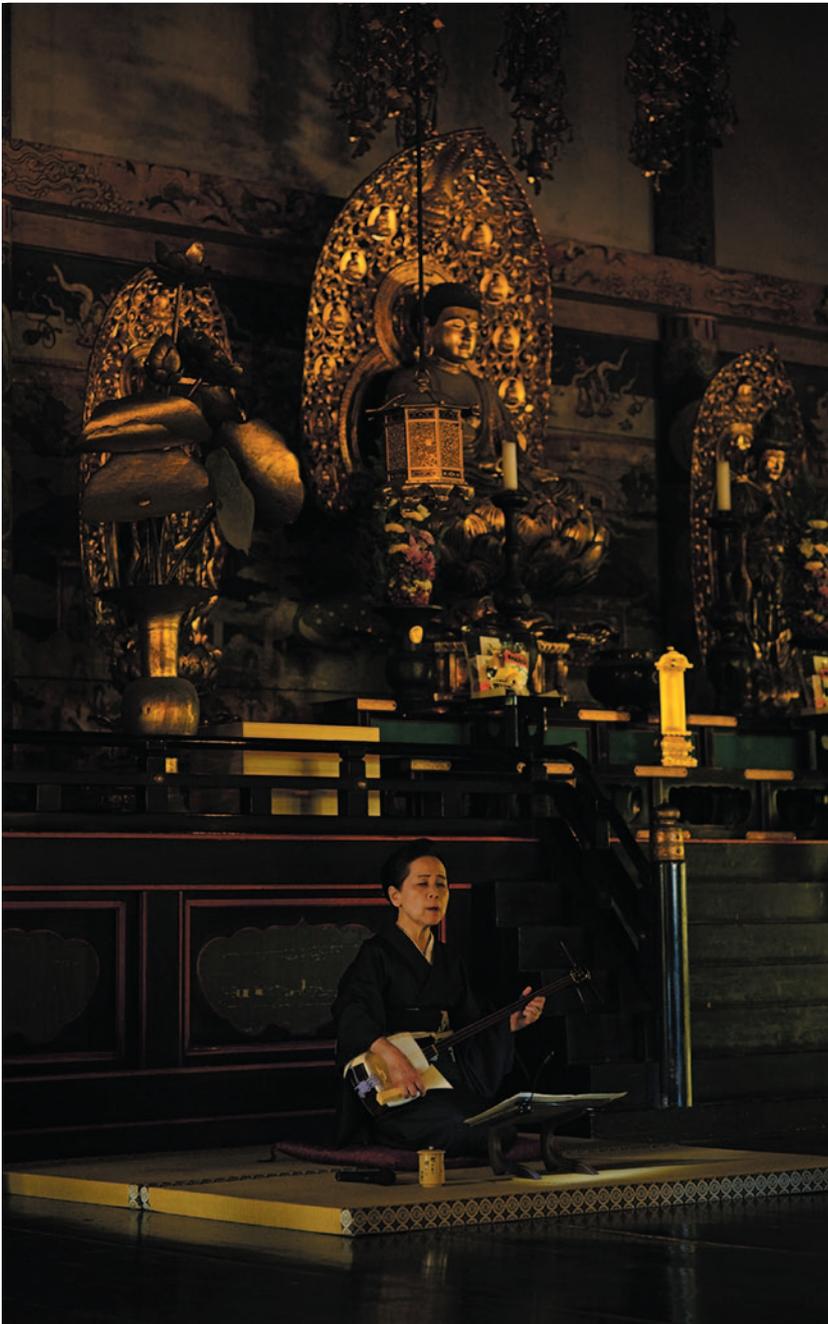
これからも私はこの答えを探しながら唄い続けなければならぬと思うし唄い続けたいと思っている。

今回の金堂公演は様々なことをもたらして下さった。他人の幸せのため他を利するためにただひたすら念じ祈るという弘法大師の教えにより宇多天皇は応仁の乱で燃え尽くしてしまった仁和寺を再建されたという。そして歴史的な人物、文化人との交流により懐の深い「仁和寺の小宇宙」に拡がっていったという。思いは様々に駆け巡ったが終演後、二王門に向かう参道は明るく照らされ夜空に聳える五重塔の真上に涙で潤んだ朧月がぼんやり滲んでいた。

前代未聞の伽藍での金堂公演のためにどんなに多くの御助力を賜ったことだろう。ご多忙のなか常に誠意を持って応対下さった仁和寺のご僧侶の方々。遥々東京や関西方面から駆けつけて下さった多く

の方々、そして骨身を惜しまず運営にあたって下さったスタッフや美紗の会のお弟子達。こうした皆様のお陰でかなった「夢のあらい」がようやく終わっただのだ。安堵と喜びとそこはかかない淋しさが入り混じり万感の想いであった。しかしながら公演は終わっていなかった。金堂奉納公演を記念して五重塔の前の地に「玄・光と闇のあらい」と記された八重桜が植樹されるとの知らせが届いたので。

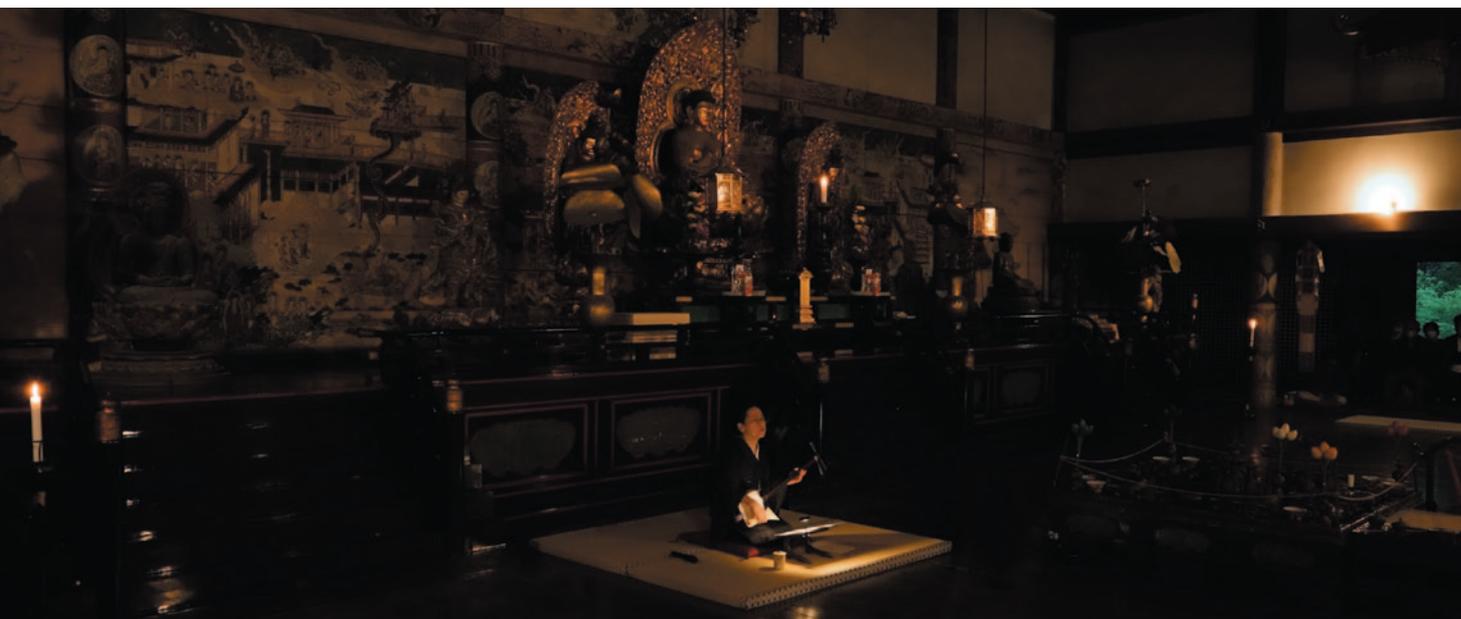
様々な方々の暖かなご協力により仁和寺の小宇宙に一本の桜が仲間入りをする！ますます美紗の会の仲間と共に「玄」への果てしない道を目指して精進してゆかねばと思う。



押本龍一



秋元正宏



押本龍一

一音一音、百億光年。

小野原教子

新幹線で京都駅まで出て在来線に乗り換えてバス。阪急電車で行くつもの線乗り換えて嵐山電鉄で徒歩。神戸から様々な行き方を探りながら、もう何度出掛けたらだろうかというくらい、頭はイメージでいっぱいになっている。思うより行くが易し。古代紫の鳥獣戯画のラッピングカーに乗車した時、あともう少しで辿り着くという安堵もあって、気がふわっと浮かんでくれる。

布詠師匠にお会いできるのは何年振りだろう。前回も京都で、司会の武田さん主催の素晴らしい演奏会で、その時も久しぶりの再会だった。あれから何年か経ち、今度は世界遺産の寺院で、師匠の生演奏を聴くことができる。夢のような出来事に、お知らせが舞い込んで来て、小躍りした。しかし、あいにく体調が優れない。関西に来られるのに、公演のお手伝いもできず、東京のお弟子さんたちとお話しできる貴重な機会でもあるのに、わたしは一聴衆として参加させてもらうことに。

精一杯お洒落をして出掛ける。京都に昔住んでいたこともあるが、嵐山方面は初めて。観光客のような気分になり写真を撮影したり、駅員さんや他の乗客の方に道を聞いたり。はしゃいでいる風とは裏腹に、こころの中は泣きそうで、本当にたどり着けるのか、お寺を拝むまで心配で仕方ない。初めて一人で電車に乗ったことものように、わたしはそわそわしている。

仁和寺の最寄駅に着くと珍しい品種の石路が爽やかに出迎えてくれて、風情のある佇まいの駅舎は自

然な装いで、ベンチに座っている可愛らしい女子高生にお寺の行き方を聞く。その前に無粋なことで、所持金が少なく幾らか出金せねばならない。五分強、寺院を後ろにして歩いて、屋根が瓦のデザインになっているコンビニエンスストアへ、ここは京都、御所近くの白いマクドナルドのことを思い出す。

お寺は大きい。わたしはますます小さい。若々しい緑と深い山に囲まれて、気分が落ち着いてくる。受付の列に並ぶ。たくさんの人々。わたしのチケットは本当に用意されているだろうか。番号を伝えられる、わたしは四五番。辿り着いて、番号を言う。わたしのチケットはない。不安は当たる。急遽一〇八番の券を準備してもらう。

砂利道を歩きながら、背の低い木が気になる、葉っぱは桜のよう。門が開くまでに、同じく待っておられる女性と話をしている。仁和寺固有の品種の桜であることを教えられる。爽やかですらった門番の男性。以前「たより」で執筆されていた若いお弟子さん。すぐわかって、嬉しくなり話しかける。知っている人に会えて、直接話せる嬉しさよ。まるで牢獄から何十年振りか出てきて、人と自由に会うことを許された罪人のような。わたしの奇妙な高揚感。ユニークな着物の着方をされていて、洋服風な着こなしがとても素敵である。

待たされる我々は、重々しい門がゆっくり音を立て開かれると、両脇にはあの桜が続く広い道。御室桜というのだそう。案内人のお坊さまが教えてくれる。わたしは落ちていた種を拾う。この半年ほど、日本全国の色々な人と植物を交換する習慣ができて、日本の在来種固定種を守る活動をしている。植えるかどうかきちんと考えもおよばないまま、反射的に腰かがめて手を伸ばして。赤い実、黒い種、その貴さが、土の上に散らばる。じぶんへの小さな

京土産になる。

会場となる金堂に近づくと、加藤さんが案内されている。前回の京都でのコンサートでもお会いしている。嬉しい。思わず手を握ってしまおう。この中で。素敵な着物の着こなしを見られて幸せに感じる。知っている人に直接会って言葉を交わす。それが十秒でも三十秒でも、大切な時間。

用意された座布団に座り、わたしはひたすら師匠の登場を待つ。下を向いて、もらったチラシを見ながら、演目を読むのだが、何も頭に入っていない。宇治茶、わたしもお稽古をつけて頂いた曲、夕暮れ、最近まで練習していた曲、黒髪、とても大好きな日本の古いブルース。これまでの様々な風景が、頭の中に浮かんで消える。流行病の昨今でよかつたことの一歩は、布詠師匠とお稽古が復活したこと。東京と神戸をリポートでつなぎ、スクリーンを通しての差し向かいでも、少し余計な間や遅れが入るのが常でも、目と目で、声と声で、お稽古をつけて頂ける時がくるとは。岐阜以来のブランクは、技術は置いて置くとして、ここには距離がなく、心地よい緊張と充実感が繋がる。

日が暮れていく。内と外の別がちょうど緩んでまじりあうような色になる。師匠の声がしている。わたしは全身耳。三味線の音も聞き逃したくなく。一声も、声と声の間の吐息も、聞き漏らしたくない。わたしのからだに全部入れて帰りたい。そのためここに居る。お堂は天井がとても高く、声は頼りになる木と反響する。かすかにわたしの左手首に身につけた数珠が掠れる音。聞こえないような聞こえるような。感じている、今日初めて下ろす。弘法大師が身近な母の出身地瀬戸内諸島の寺院より頂いた、繋がっている菩提樹の球、わたしのお洒落。闇ならば消えてしまいそうなのに、薄明かりのやわ



押本龍一

らかい暗さの中で、なんとなくみんなの耳のありかが感じられる。幕間に登場された武田さんが「目を閉じてください」と一言、わたしはまさにそのとき目を閉じているのだが、その声の意味が明るくなり、わたしは今まで覚えていたような、不思議な感覚に。耳は、一人二つずつ。平等に与えられている。二つずつの耳は、布詠師匠を見つめている。

はるか遠くにいるはずの人々、それは人間だけではない。花も木も虫も鳥も、小さな動物も大きな動物も、この声に魅了されている。お釈迦さまより脈々と受け継がれてきた仏教、日本へはインドから中国、朝鮮半島と海を越えて入ってきて、やがていくつもの宗派が思想として分かれても、繋がっている一本の糸があり、それは見えずとも紡がれて、ここに纏わせる布のように、存在している。

落ち着かず不安なわたしはまだここに居て、大き

なお堂の中でかすかな光を感じながら、目を閉じている。すると、やがて空間はあかるくなり、なにかを観ているような、小さなじんがっている。からだか、こころか。黄泉の国より、呼ばれて来た高僧、また名前のかからない生き物たち、生きていくのか死んでいるのか、そんな判断や分別からは自由な存在、ありとあらゆるものが渾然一体として、美しい声、研ぎ澄まされた音、その演者である西松布詠というひとりの人に、引き寄せられ、眠ったままではいられないのだ。観衆の中に忍び込んでいく。

師匠のお話はいつもわかりよい、何度聞いても初めて聞くような語りのおもしろさ、そして演奏へと知らぬ間に正しく導かれる。繊細さと逞しさの振り幅が、豊かな抑揚となり、楽器とからだがお互いをもたれさせ、ゆずれられ、こだましながら、時間を超えていく。動態的に静謐な充溢した空間、デザインされてできあがる。

わたしはどんどん小さくなっていく。極小に、極微になって、今ここにいることすら忘れさせられるような。ずっとはるか昔、記憶のスピードからはちぎられた宇宙の渦のなかで、わたしはわたしの耳だけが永遠のいのちを与えられているような。その聴覚器官から華が咲きほこるような。そんな体験。からだも、こころも。音楽のつよさ、それを演じる人間のいのちの神々しさ。末端であっても、弟子という呼び名にしがみつきたいわたしは、極微力であっても、この人をまもらなければ、とおもう。わたしたちがまもらなければならぬ。日本の宝、そして、世界の宝。芸は、こころは、受け継がれていく、いのちの旅路として。無形のまま、幾重にも響きわたり、紡がれる声、織物の姿となる。わたしたちの大切な布詠師匠、あらゆる分断の矢から、絶対にまもらなければならぬ。

透明の袈裟

一音一音
百億光年
小さなわたしを
呼び覚ます
幾つものみみ
正しい方角
あなたという一点
集められてデザイン
花も木も鳥も虫も
猫も兎も犬も寅も
高僧も凡夫も皆ともに
薄明かりの夢をつむぐ
迷うわたし
わたしたちになる時
その声のきめに
透明な袈裟を着せる
いのちの旅路の証文として

(二〇二二年五月十四日・
西松布咏師匠京都仁和寺奉納公演の詩)

「始めたきっかけ」

川東 厚子

友人に誘われて、昨年十一月二十八日の「美紗の会のつどい」に行きました。

邦楽、三味線、小唄、端唄など、言葉は聞いたことはありましたが、実際に見聞きするのは初めてでした。まるで知らない分野でしたので、興味本位と友人が誘ってくださったからという理由で出かけたわけです。

港区立伝統文化交流館が趣あつて立派な建物で驚き、雰囲気も和やかな感じでした。三味線の音や唄声が心地よく聞こえてきましたが、洋楽と違ってなんだかなじめない感じがしました。もともと興味が無かったので、途中から入り、途中退出してしまつたくらいです。

家に帰ってから改めてプログラムを見ました。お稽古の場所を見ると、白金台でした。そういえば、お散歩コースを歩いていたときに、カフェ「ぶどう

の樹」の横の案内板にプログラムが掲示してあったのを思い出しました。自宅から近いのは何かの縁かもしれないと思い、これまた興味本位で西松先生にお電話をしたわけです。

昨年の十二月に見学に行きました。習う気はなかったのに、間近で見る先生が素敵で、先生の素晴らしいお人柄に心引かれ、個人指導ということもあって、今年の一月に入会しました。三味線を習うなんて、誰がびっくりしたかって、私自身が一番びっくりしました。

入会してまもなく「美紗の会のつどい」に出るとは、思ってもみませんでした。何しろ初めての事ばかりで、当日が近づいてくるに従ってドキドキ、緊張の日々が続きました。

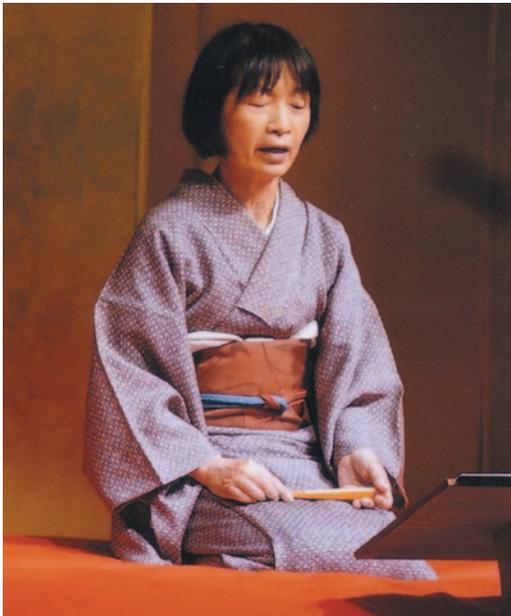
当日は先生のご指導ご尽力のお陰で、どうにか終えることが出来ました。良い経験が出来ましたが、聞いていた方々は雑音で大変だったことでしょう。だんだん興味が出てきましたので、今後はなるべく練習して、楽しく長く続けられたら良いなあと思っております。

陰影という深み

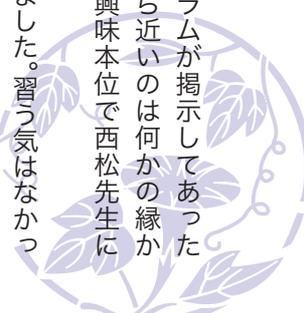
第六三回美紗の会のつどい ヤリタミサコ

四月二十九日雨の中、第六三回美紗の会のつどいが開催されました。ゴールデンウィーク初日なのですが、和風伝統建築と畳、三味線には、この暗めの光の方がびったりくると感じました。明るすぎる太陽よりも、この陰りの方が落ち着きます。

人の心は、ポジティブな前向き気分でも部分的には暗い要素が含まれていたり、先の見えない絶望状態でもかすかな希望が含まれていたり、一つだけの



前川 充



色で表現できるものではありません。待ち人を待つ期待と不安が入り交じる感覚、恋愛の喜びと悲しみ、未来を夢見る気持ちと現実の乖離など、揺れ動いたリ変幻していく人の心は、見えるようで見えず、捉えられるようで捉えられないものです。それは、ろうそくや行灯の光のような弱い光のゆらめきのようです。唄の中で語られる言葉は少ないですが、声と三味線でそれをリライズするときに、矛盾する思いやゆらぎが込められて表現されます。

歌詞はごく一部だけの表現ですが、表面に見える言葉のその奥底に、迷い・後悔・希望・記憶・夢想など多層に沈潜する複雑な感情が隠れています。その言葉に結実するまでの経緯は、裏側に存在しています。そして聞く人、唄う人、それぞれが人生の憂さを重ねるのだと思います。歌舞伎もそうで、弁慶や内蔵助や熊谷直実などの有名人の姿を借りながら、理不尽な別れ、運命の無情さ、結ばれない恋人たち、逃れられない役割など、向けどころのない怒りや悲しみを彼らの姿に仮託して庶民は涙を流します。

このような唄を、美紗の会では一人ずつ個性豊かに表現されてきました。もともとの声の質や、人生経験や音楽経験の違いがあるので、西洋音楽の五線譜に書かれた音楽のように音符がきれいに聞こえる人もあり、唄を自分流の色に取り込んでいる人もいて、様々なスタイルの違いがだんだんと見えてきます。自分の身体より少し遠いところで言葉を感じながら唄う人、歌詞に込められた情念に共感している人、私はそれぞれの唄の違いを楽しみました。声量の大小はやむをえない部分がありますが、体全体から発する響きは聞いていて開放感があります。口周辺からの発声だけだと、このような大きな会場では少々厳しいです。また、三味線は金属弦と違って音程が変わりやすくむずかしいと思いますが、三味線

という楽器自体も唄ってくれるのが理想でしょうか。個別の印象では、高橋輝一郎さんの「御所のお庭」ではのびやかな男声が印象的でした。高橋美恵子さんの「忍ぶ恋路／ほんのりと」では、声が体に響いて唄う楽しさが伝わってきました。川崎さんの



前川 充

唄は余裕があって粋な空気に満ち、唄が文化的な遊びであると感じられました。典咏さんのドラマティックな唄はすばらしく、オペラのアリアのようでした。紫咏さんの「お園」は歌詞の表情が丁寧な描かれていて、全体がまとまっています。咏扇さんの「綱は上意」は、演奏者の心に明確なストーリーがしっかり解釈・構成されているので、音曲だけで登場人物の動画が見えるようです。秋咏さんの「紫陽花」では江戸の陰影が鮮やかに表現されていて、「エンヤラエー」という掛け声が生きたアクセントでした。

また司会の稲垣文子さんによる出演者の軽妙な紹介がすばらしいのですが、今回は足のお怪我にもかかわらず明るいお声での奮闘に感じ入りました。中学生の息子さんの落語はなかなか巧く、唄の合間の絶好の場面転換でした。早口言葉の笑いによって、舞台後半も新鮮に感じます。

今回は忠咏さんと草咏さんの出演がかなわなくて残念でしたが、その分、お二人の代わりに演奏された布咏さんの唄と演奏を堪能できました。特に豊後節はテクニカルにむずかしい作品のように思いますが、布咏さんの熱演は、イマ風な言葉で言うところ「ムネアツ（胸熱）」でした。お二人の次回のご出演を楽しみにしております。

ラストの扇ひでさんの舞踊は、男踊りということでもユーモラスに明るく楽しい舞台で、布咏さんの唄もカラフルな印象でした。帰り道の足もとが軽くなるような気持ちにさせてくれる、お二人でした。

この後は鑑木清方の展覧会に行ったので、江戸から明治への陰影をずっと抱えて過ごした一日でした。清方を見ながら自分の脳内で三味線の音が再生できたのは、美紗の会の皆様のすばらしい演奏のおかげです。ありがとうございました。



■たより第69号

発行者 美紗の会

編集責任者 照沼 太佳子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三・二・一

白金台プレイス三階

電話 (五四四七) 一四一一

E_mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL:<http://www.misanokai.com/>

